大熊町を
端から端まで
知りつくそう！

# ふるさと再発見

## 旧地名を訪ねて

## ●第4回　小良浜地区

（〒979-1304）

この地区は熊川から太平洋を望む富岡町との境にあります。

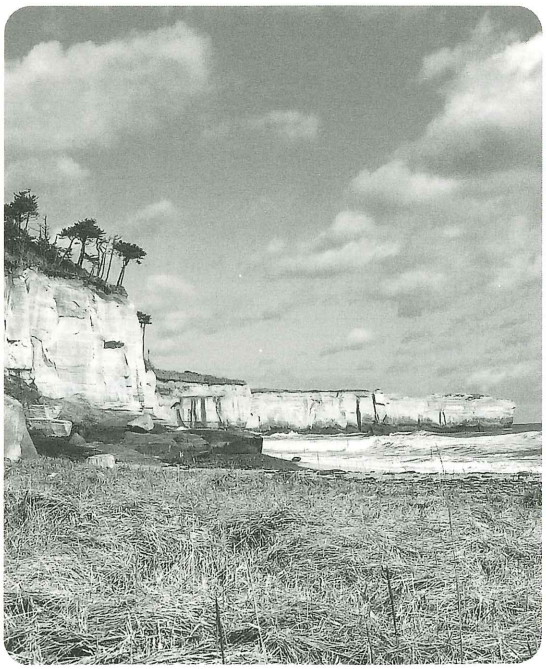
古くは岩城藩と相馬藩の境の地であり合戦がありました。

旧地名には対面場、太刀洗などその名残りがあります。

数年前まで日本で一番小さい港があるところで知られていました。

### 小良浜地区
### 新旧字名一覧表

| 新 | 高平（タカダイラ） | |
|---|---|---|
| 旧 | 北堀切（キタホリキリ） | 太刀洗（タチアライ） |
| | 南堀切（ミナミホリキリ） | 堤下（ツツミシタ） |
| | 対面場（タイメンバ） | 西畑（ニシハタ） |
| | 岩下（イワシタ） | 西留場（ニシトメバ） |
| | 牛地獄（ウシジゴク） | 羽山（ハヤマ） |
| | 落舘（オチダテ） | 日向（ヒナタ） |
| | 北迫（キタサク） | 東留場（ヒガシトメバ） |
| | 小熊田原（コグマダハラ） | 前浜原（マエハマハラ） |
| | 腰巻（コシマキ） | 童作（ワラベサク） |
| | 沢入（サワイリ） | 前田（マエダ） |



（1月31日現在）

| 人口 | 男 | 女 | 合計 |
|---|---|---|---|
| 高平 | 49 | 46 | 95 |

小良浜地区の現地取材の時、ちょうど通りかかった地区の坂本東洋男さんにお話を伺いました。

大昔、ここには八十戸位家があったが、良い土地がなかったので、大和久の方に行って米を作っていた者もいた。原野を刈り込んで稲作りをしたが、苗を馬に一ダン積んで行っても取れた稲は一ダンにもならなかったというから、大和久の土地もずいぶん悪かったようだ。

助宗の堤ができてからはここでも米が作れるようになって、収穫量も増えた。

笠松の碑は今から七十年位前に、道路を造るために現在の所に移された。側にあった笠松も五十年くらい前に枯れてしまった。その根本に太刀洗の池があって、戦場で血に染まった刀を洗った池と伝えられている。その池も草木に覆われ、シャガの群生が池の名残りをとどめている。又、富岡町との境には見物山と言われた小高い山が有り、戦の模様を見物していた所と伝えられている。

熊川海岸からのぞむ馬の背岬

現在の馬の背岬

## 馬の背岬周辺

文化センターの緞帳のデザインになっている馬の背岬は熊川海岸の突端にあります。

以前は太った馬の背で、釣り人のメッカでしたが年々、浸食され馬の背も細くなり、今は進入禁止の危険な断崖となっています。そのあたりは浜小菊が咲き乱れ、ウメバチソウの群生がみられたところでした。

近くの海岸線は昭和五十一年頃、別荘地として開発され、現在も数件残っています。

この海岸線には椿の原生林が多くあり、その昔、大島から椿の実を運搬していた船が小良浜沖で難破し、椿の実が流れ着き自生したという話を実証しているようである。

現在は、陸前浜街道の整備が進められ、富岡町では小良ケ浜の海岸線を椿街道として観光スポットにしている。

## 円澄和尚物語（民話）

むかし。

遍照寺というお寺に、円澄という狂歌の好きな和尚さんがおりました。

附近に住む清兵衛は、根っからの呑気者で、五月の田植時がきても仕事に精を出すこともなく、毎日毎日ごろりと昼寝ばかりしていましたので、仲の良い和尚は早速、「農の五月に昼寝して、秋の俵になにを清兵衛（入べい）」と狂歌を贈りました。

ある日のこと、和尚は磐城小良浜に出かけ、酒の馳走をうけて帰路につきましたが、その頃の道は相馬小良浜の南はずれの坂をのぼりつめたところから海よりの笠松、太刀洗を通って小熊田に通じていました。

笠松は大変立派な枝ぶりの良い大松で、その枝は附近の水田の中ばまで達していました。

附近の安保原地蔵も、土地の人たちの信仰のまとでありましたし、笠松の根方にある太刀洗の池には昔、仇討ちに諸国をまわった侍が、対面場で敵と出会い、首尾よく仇を討ったあと、この池で血刀を洗ったなどと語り伝えられていました。

また、笠松の付近にはなぜか左巻きのツブが住んでいて、食べると腹痛がおきると言われていました。

千鳥足で笠松にたどりついた円澄和尚は、打ち寄せる波間に映る月影と、千鳥の声にじっとたたずんで考えこみましたが、やがて、

小夜ふけて千鳥鳴くなり笠松の　磯辺に寄する波の月影

と口ずさむなりスタスタと歩きだしました。

このの ち何故か笠松は精気を失って、だんだんと枯れてあとかたもなくなりました。現在は街道から入った細道のほとり安保原地蔵の片すみの大木の根元に、幅四五センチ、厚さ二十センチ、高さ八十センチの長円形の小碑が、訪れる人もいない静けさの中に建っています。